

令和7年度 学校評価アンケートの分析

質問1 学校生活充実度

- ・学校生活の充実度について、生徒と保護者は昨年に続き約9割が肯定的な回答を寄せており、日々の学校生活が生徒自身も保護者の観点からも充実度が高いことが読み取れる。
- ・ただし、教員は昨年に比して、2割程度の肯定的な回答の減少が確認されている。教科指導や生活指導において、種々の課題が表面化する現実を真摯に受け止め、さらなる充実度の高みへと導く手立てを模索していることの裏付けとも考えられる。

質問2・3 学習指導

- ・授業方法の工夫については、昨年に続き多数の教員が実践していると肯定的な回答をしている。一方、昨年に続き生徒の2割弱が否定的な回答を寄せている。すべての生徒に対するわかりやすい授業の実現に向けた教員のさらなる創意工夫が求められている。
- ・保護者は「わからない」の回答が昨年に続き2割を超える回答が認められる。授業公開を通して、一人でも多くの保護者に学習状況の実態を把握していただくことに努めていく必要がある。
- ・授業への積極的な取組に関しては、教員の8割弱の肯定的な回答に反し、ほぼ9割の生徒が積極的に授業に取り組んでいると回答している。教員は、生徒の回答から得られた意欲を前向きに捉え、わかりやすい授業の実現を図り、生徒の積極性をさらに引き出し続けていかねばならない。

質問4 一人1台端末

- ・教員が昨年に比して1割増加の9割近くの肯定的な回答を寄せている。授業はもとより、スマスク（一人1台端末）の活用による広範な指導が定着を見せつつあることが伺える。
- ・ただし、生徒の肯定的な回答が昨年より若干減少し7割にとどまっていることが課題である。端末の有効活用以前の問題として、日常的な端末の携行と取り扱いの徹底を促し、教育効果を高めていくよう学校全体で指導の在り方を共有する必要がある。

質問5・6・7・8 生活指導

- ・学校が行っている生活指導の適切さについて、生徒は昨年から1割増加の8割強の肯定的な回答が見られ、学校の指導に信頼が寄せられていると判断できる。一方、保護者は昨年に続き7割強の肯定的な回答にとどまり、2割弱の否定的な回答が続く。加えて、教員の肯定的な回答が昨年から2割余り減少している。学校としての統一した生活指導の在り方や生徒への指導の方向性が個々の判断に委ねられ、結果、生徒の肯定的な回答に繋がっていると考えられなくもない。
- ・時間の管理については、生徒は昨年に続き非常に高い肯定的な回答をしている。反面、教員は生徒の実態に改善の余地があると回答しており両者に乖離が見られる。時間の有効活用は、社会人として求められる資質であり、教員は生徒に改善点をわかりやすく指導していく必要がある。
- ・通学のマナーについては、生徒の9割超の肯定的な回答に対し、教員の4割弱の肯定的な回答との乖離が顕著である。生徒が考えるマナー意識の是非を具体的に確認する必要がある。最寄り駅や近隣からいただく苦情の数々を生徒に適切に周知し、自戒の念を持たせる指導が必要である。
- ・挨拶の励行については、生徒も教員も、非常に高いレベルで肯定的な回答が合致しており、集団の一員としての自覚が育まれていることが理解できる。この良好な状況を、時機を捉え両者で確認し、本校の大きな財産として定着させていくべきである。ただし、保護者の肯定的な回答が7割余りと低調であることは見逃せない。生徒と教員の校内の関係に終始せず、外部からの来訪者にも自然な挨拶ができるよう校風を醸成していく必要がある。

質問 9・10 学校行事

- ・学校行事については、生徒、保護者、教員ともに昨年に続き高いレベルで肯定的な回答が見られる。バリエーション豊かな学校行事を通して、人間的な成長やコミュニケーション能力を高めていこうとする本校の長年の積み重ねが、充実度として顕在化してきている証であることに相違ない。
- ・高い肯定感が寄せられる学校行事であるからこそ、生徒の高い参加意欲を尊重し、企画並びに運営を生徒の手に委ね、自分たちが主役である自覚を涵養し、達成感や成就感を共有させることで学校への帰属意識の高まりへと昇華させる道筋をさらに高揚させていくことが求められる。

質問 11 地域との連携

- ・ボランティア活動や府中けやきの森学園との交流活動等について、生徒、保護者、教員ともに高いレベルで肯定的な回答が見られる。生徒会執行部を中心としたボランティア活動に対し、教員の肯定的な評価が昨年に比して低下している状況も見受けられるが、総じて本校の生徒の連携意識の高まりは、生徒個々の在籍時の取り組みとして高く評価できるものである。

質問 12・13 部活動

- ・部活動は、生徒と教員は高いレベルで肯定的に捉えている。特に、教員は高い数値を示し、意欲的に部活動に取り組んでいると回答しており、その下支えがあってこそその生徒の回答と受け取られる。しかし、保護者の回答は、昨年に続き6割強にとどまり、「わからない」の回答が約2割と多く、部活動単位での保護者会やホームページなどで十分な理解を深めていただく必要がある。
- ・生徒も教員も、部活動を通して学校生活を豊かにしていると高い肯定的な回答をしている。教員の働き方改革の進捗を図りつつも、本校の特色である部活動と学校行事が生徒の主体性を高め、ひいては学習活動の活性化に影響を及ぼし、日常のたゆまぬ努力の継続こそが将来への大きな財産になることを自覚させる契機として今後も指導を展開していくことが求められている。

質問 14 進路指導

- ・教員は、進路に関する情報の提供や進路指導について全校を挙げ実施していると回答している。その傾向を受け、生徒の9割強が肯定的な回答を寄せている。保護者の肯定的な回答が、約6割と横ばいではあるものの、今後も、進路保障の一環として学年相応の段階に応じた進路行事や三者面談の実施など、より丁寧な情報の提供が求められる。

質問 15 進学指導

- ・生徒も教員も、進路行事をはじめ補習や夏期講習を通して進学指導が実施されていると昨年に続き高い肯定的な回答をしている。この数値が、本校の近年の進路実績や進学実績の向上に直結していることは疑う余地もない。また、ほぼ年内に実施される推薦入試が大学入学の主流を占める状況への対応として、今年度から全教員で指導に当たる方策を取り入れたが、今後も論文指導や面接指導の在り方を共有し、指導方針の一層の向上を図る必要がある。

質問 16 校内美化

- ・ゴミの分別や持ち帰り、教室の清掃や校内の環境美化については、生徒は9割余りが肯定的な回答をしている。しかし、教員は昨年からの肯定的な回答が4割近く減少している。ごみ問題は、社会的な課題として自浄能力が問われている。学校においてもごみ箱の再設置をはじめ、自分たちの快適な環境を維持していく上からも、校内美化の実態から目をそらさず、生徒と教員が一体となり環境保全について、相互に具体的な解決策を模索していくことが求められている。

質問 17 施設の整備

・教室、特別教室、体育施設等が学習や生活がしやすいように整備されているかについては、生徒、教員ともに昨年に続き非常に高い肯定的な回答をしている。保護者は「わからない」の回答が多いものの、授業公開や文化祭、部活動の保護者会などを通して、本校の整備された環境について関心が高まっていくよう工夫していく必要がある。

質問 18 保健・安全の指導

・保健だよりやセーフティ教室等を通じた健康や安全に関わる指導は、定期的な機関誌の発行や学期末の有効活用により、生徒、保護者、教員ともに昨年に続き非常に高い肯定的な回答を得ている。この実態をさらに高めていくためにも、今後も引き続き、多面的な指導を展開していく必要がある。

質問 19 生命尊重の指導

・学校が総力を挙げ、教員が生命の重さや人と人との関わりの大切さについて適切に指導していることにより、生徒も9割以上の肯定的な回答を寄せている。このことは、青年期を生きる生徒にとって、命の大切さは何物にも代えがたい事実であることを直視することにより、軽率な行動を厳に慎む姿勢の涵養につながっていると判断できる。年3回のいじめ防止アンケートの実施や、生徒のサインを見逃さない教員研修などを引き続き実効性のある内容にしていく必要がある。

質問 20 悩みへの相談

・生徒が抱える様々な悩みへの対応は、二者面談の実施やスクールカウンセラーの全員面接及びニーズに応じたカウンセリングなどにより、生徒も教員も昨年に続き肯定的な意見が寄せられている。ただし、保護者の5割強が否定的な回答もしくは「わからない」と回答していることから、本校に入学後の早期且つ3年間を見越した定期的な3者面談の実施や、スクールカウンセラーの保護者面接などをさらに充実させ、実践していくことが求められている。

質問 21 体罰防止

・体罰防止についての積極的な取組については、教員ほぼ全員が肯定的であるものの、生徒の1割余りが否定的な回答をしている。保護者は「わからない」の回答が多く、年2回の体罰調査の実施や体罰・暴言根絶に向けた取り組みを広く伝えていく必要がある。この項目に関しては、生徒も保護者も教員も、100%の肯定的な回答に収束することが求められている。

質問 22 ホームページの充実

・ホームページにおける情報発信やPRについては、生徒と保護者は昨年より微増し高い肯定的な回答が得られている。教員の割合は、回答としては減少しているものの、更新回数の増加や「府中東高日記」などの更新による学校の働きかけにより、ホームページへの関心の高まりは顕在化しているものと考えられる。

質問 23 ライフワークバランス（働き方改革）

・部活動を外部指導員に依頼するなど、時代の流れに即した教員の働き方の在り方について、昨年に続き生徒の9割強が肯定的な回答を寄せている。保護者の回答も、昨年より微増しているが、「わからない」の占める割合が大きい。教員は、学校での働き方の改善へのアプローチにより、昨年より肯定的な回答が微増している。学校は、教員にとっての働き方に対する意識を最大限に尊重し、効率的で実効性のある方策を展開していくことが求められている。

質問 24 入学満足度

・生徒、保護者、教員ともに、「入学して良かった」と9割弱の高い肯定的回答を得ている。課題としては、生徒、保護者、教員の3者の1割強の否定的回答の原因がどこにあるのかを問うことである。希望をもって日々、活動を展開する生徒にとって、卒業時に「本校を選んで正解だった」と振り返ることができる学校生活の充実に向け、3者が一体となりさらなる満足度の向上を目指し、中長期的に課題の克服に取り組んでいくことが、最も求められている。